異郷の友

前岡光明

……赤い靴　はいてた　女の子
異人さんに　つれられて　行っちゃった……

この頃、ふと、この歌が口に出る。

二月も末になり、暖かい日など、どうやらこの冬をしのぐことが出来たと安堵する気持があって、このような童謡を口ずさむのだろう。

「歌詞にはふさわしいメロデーがある。それが愛される歌だ」という人がいたが、その通りだと思う。最近の若い人たちの流行の歌に、私はついていけない。連続テレビ小説の主題歌にしてもそうだ。歌いにくい、奇をてらったかのような歌は、すぐに消えて行く。

この「赤い靴」はまさに、時を越え皆に愛される歌だ。幸薄い、身寄りのない女の子が、アメリカ人宣教師に救われるのである。ピカピカの赤い靴を履いて、旅の支度を終えた女の子である。

……横浜の　はとばから、ふねに乗って、
異人さんに　つれられて、行っちゃった……

恵まれない境遇から抜け出せるとはいえ、故国を離れ、遠い異国に発つ。そんな悲しみが、この歌のメロデーにある。

野口有情作詞、本居長世作曲である。

私が赤い靴を口ずさむのは、たぶんに、幼い孫娘の面影を追ってのことである。彼女が健やかに育ってくれとの思いが、ふと、この歌を口に出すのだろう。

近くに住んでいて、生まれた時から、妻と私がよく子守をしてきた。保育園に入り、近所に友だちが出来て、だんだん私たちから離れてゆく。どんなに愛おしくと

も、毎日顔を見たくとも、親が居るし、私達は見守るだけだと、寂しさをこらえている。そんな気持がこの歌を口ずさませるのだろう。

この頃、私は、ブラジルにいるT君のことよく思い出す。中学の同級の、大柄で骨太な男だった。私たちはその町の進学校に進んだ。T君は卒業後上京し、昼間家電販売店で働きながら夜学に通った。そして、学校を出るとインテリア工事会社に就職した。小さな会社だったが、急成長し従業員一五〇名ほどの規模になり、やがて三〇名ほどの子会社を作った。その後、彼は五〇才ぐらいでその子会社の社長を継いで業績を伸ばした。

私は、地方の工事現場を転々としていて、その頃東京の本社に転勤してきて、彼と再会した。昔と変わらぬ誠実な男だった。

ある日、彼は離婚したと言った。同い年の奥さんだと聞いていたが、どんな人かは知らない。それこそ性格の不一致があったのだろうと想像した。彼は早婚だった。娘と息子が居て、順調に自立したようだった。彼に浮ついた話はなかった。

何年かして、酒を酌み交わしながら、「女房が再婚した。ほっとした」と独り言のように言ったので、驚いたが、私は彼らしいと思った。詳しく聞いてはいけないことのようだったので、それまでにした。

それから、間もなくして彼は大腸ガンを手術した。私も見舞った。彼は覚悟を決め、身辺整理を済ましていたようだった。会社の後継者を誰にするか悩んだと話していた。三〇センチほど直腸を切って、彼は無事復帰した。そして、その時に世話になった看護助手の人がブラジルの日本人一世で、というのは彼女が幼い頃に両親に連れられて移住したのだが、その人と親しくなって、デートしたと話していた。年が離れていたが二人は結婚した。

そして、新婚旅行を兼ねてブラジルに帰った時に、サンパウロで奥さんが突然、ギランバレー症候群という病で倒れ、奥さんの兄弟に相談して、三百キロ離れた、住いの近くの病院に搬送した。三ヶ月入院し、奥さんは一命を取り留めたという波乱があった。

やがてバブルがはじけ不景気が彼の商売に影を落とした。「仕事を受注しても、工事代金が回収できるかどうかが問題だ」と、営業の難しさを語っていた。そして、「おれの体に生命保険を掛けて銀行から金を借りた」と、話していた。

とうとう彼の会社は倒産した。「突然、融資打ち切りと言われて、それでお終いだった。冷たいもんだ」と、彼は言った。

「おれは、従業員には規程通りの退職金を払った。それだけは弁護士に褒められた」と言った。確かに彼はそんな男だった。

彼は奥さんと二人で賃貸アパートでひっそり暮らしていた。彼は昔取った杵柄で、内装の仕事のアルバイトをしていた。

ある時、私は相談された。

「このまま日本で暮らしていたら、身寄りのいない女房がかわいそうだ。彼女の両親は亡くなったが、兄弟はブラジルにいる。それに、ビザのことがあって、彼女は一年おきにブラジルに帰らねばならない。思い切って向うで暮らそうかと思っている。しかし、迷っている」

「奥さんを大事にしたいのなら、向うへ行くしかないじゃないか」と、私は答えた。その時、ちょいちょい日本に帰ってくればいいじゃないかという気持ちが私にはあった。

そうやって、彼はブラジルに渡った。

遠い異郷に渡った、T君と、赤い靴の女の子である。

しかし、実際は、この赤い靴を履いた女の子は、アメリカに渡らなかった。出発時の検疫で引っかかって、日本に置き去りにされたという後日談があった。

幼子なりに描いた明日の夢を打ち破られた無念、理不尽な運命の悲哀がこのメロディに隠されていたのだ。

そして、詳しい事実を調べると次のとおりである。

異父妹の三女が、昭和四八年に『私の姉は赤い靴の女の子』と新聞投書したのが発端で、事実経過の掘り起こしが始まった。

この女の子は明治三五年生まれで、私生児だった。静岡出身の母に連れられ北海道に渡り、母は結婚した。夫婦は、当時社会主義運動の一環として注目された平民農場に入植したが、生活の厳しさに、母は三才のその娘の養育を義父に託した。

そして、母親は、娘が宣教師に連れられてアメリカに渡ったと聞かされ、終生そう信じていた。それで、夫の同僚の、野口有情に娘のことを話したということだ。大正十一年にこの曲は発表された。

三番、四番は、

……今では　青い目に　なっちゃって
異人さんの　お国に　いるんだろう。

赤い靴　見るたび　考える
異人さんに　あうたび　考える……

であるが、四番の「考える」は、まさに母親の胸中だろう。
娘は孤児院で、結核を病み、九才で亡くなっていた。
そして、そのアメリカ人宣教師と女の子にはまったく接点がなかったようである。
ここまで背景を知ると、義父の冷酷な嘘を信じ切った母親の哀れさが身に染みる。
でも、彼女はそれでよかったのだ。まさに明治男の非情の情けであった。

赤い靴の五番、未公表の草稿がある。
……生まれた　日本が　恋しくば
青い海眺めて　いるんだろう
異人さんに　たのんで　帰って来（こ）……

最後の行は、私はリフレーンで歌っている。

さて、もう、八、九年になるが、新宿で開いたT君の歓送会に皆が集った。その時、「一年したら戻って来て、向うの様子を報告するよ」と言っていたT君だが、それから一度も帰ってこない。
ブラジルからの旅費は、年金生活者の彼にとって大変なことだろう。まして、一時、自己破産してすべてを失った男だ。
私たちは、年に何回かメールのやり取りをしている。彼は娘さんの乳ガンのことを案じていた。
寄る年波、互いに医者にかかった。奥さんもひざが悪いそうだ。でも、元気そう

で暮らしているのが何よりだ。

これから秋も深まる遠い異郷の地で、彼はどんな望郷の歌を口ずさんでいるのだろう。